

JAZZ
マサコ

下北沢
路地裏
ツアー

grasshouse



茶沢通りに面した北沢タウンホールのアトリウムを通して、淡い光がフロアを水色に染めている。桜の散ったなごりが、まだ町のそこかしこに残っていた。

それでも春とはいえ、すでにいささか蒸し蒸しするほどの暑い陽気であった。

すぐ向い側のバス停から、のろのろと三軒茶屋方面に、バスが走り出す。車体には、春にしては強過ぎる陽が舐めるように照りつけ、まばゆい光を反射している。

閑散とした広いタウンホールの一階ロビーでは、椅子とテーブルが散在していた。

カップルが黙り込んでコーヒーを啜っている。

他にも暇そうな年金生活者ふうの老人、買い物籠をかかえこんだまま放心したような顔で休んでいる主婦、仕事を探し疲れてタバコをふかしているといった風情の若者などが、所在なさげに腰を降ろしていた。無言で、あるいは小声で囁きながら座っている彼らの足元には、青灰色の短い影が落ちていた。

奥の方では、ガラス越しに二三人の職員がデスクに向っているのが見える。いかにも日曜の午後の公共施設の退屈そうな風景だ。

さっきから羽木努は、いやな予感がしていた。

自販機の前で旗を持って立っている初老の人物が、このツアーの主宰者だろうか。《下北沢路地裏ツアー》と旗に書きつけてある。

年の頃はおそらく七十代、若くて六十代後半だろう。胡麻塩頭に褪せた紺色のキャップを被り、白いもののまじった顎髯を生やしている。小柄だが精悍な印象があり、全身に何か闘志のようなただならぬものを放っている。両足を踏ん張るようにして、仁王のように立ち尽くしているのだ。

彼はそれとなく自販機にコインを入れて、冷たいコーヒーを飲んだ。

「あなた、メールくれた方？」

いきなり老人の顔が、隣にあった。

「ええ。すみません」

「謝ることないよ。それにしても今日は、集まりが悪いなあ。もう、予定時間なんだが」

老人は、時計を見た。二時過ぎ。無骨なダイバーズ・ウォッチだ。

やっぱりやめとけばよかった。ほんの思い付きで参加した市民団体のイベントではあった。しかし、このいかにも頑固そうな、煮ても焼いても食えないような老人と二人だけで、二三時間歩くことになるのだろうか。

気の弱い彼は憂鬱になった。せっかくの天気なのだから、家の近くの野川沿いの遊歩道でもゆっくり散歩していればよかった、と彼は思う。

「私、こういう者です」

白髪まじりの老人は、にこりともせず、名刺を手渡した。

——画家 アトリエ牧田主宰 彩明会会員 牧田徹吾——

洋画家というよりは、作務衣が似合いそうな、頑固な職人といった感じの人物だ。人生についていらぬ説教でもされてしまいそうだ。

羽木務は、名刺を持ってきていないことを謝り、喜多見に住むフリーのライターですといった。知人の編集プロダクションからの急ぎの仕事が入っていたのに、なかなか集中できず、ネットで調べ物をしていると、たまたまこの『路地裏ツアー』の広報が目についた。いっそ気分転換にと思って、足を向けたのである。

灰色のハンチングを被り、ステッキを持った背の低い小太りの老人が、にこやかに挨拶した。「お世話になりますよ」この人も参加するらしい。甲高い嘎れ声で、昔の江戸っ子ふうの雰囲気のある老人だ。祭りの日など、半被を着て世話役などやったら似合いそうである。

——突然、エントランスの回転扉が回って、いきなり華やかな空気が撒き散らされた。

「ごめんなさい、牧田先生。ちょっと秘書との打ち合わせが長引いちゃって」

「五分遅刻」ぼそりと画家はいった。

「もう、いじめないでよ、そうやって」

すねたように、笑った。

「こちらが有名な美人区議の御厨景子さん。こちら、今回初参加の、ええと、羽木さんでしたっけ」画家はそれぞれを紹介した。

「あたし、話には訊いてたものの、今回参加は初めてなんです。ちゃんと再開発計画の具体的な範囲を、自分の目で確認しておかないとね」

「ええ。僕もこの道路計画は、ネットや広報で知っていただけで」

羽木務は目をぱちくりさせた。

ひょっとして、区の広報誌などに顔写真入りで出てくるあの女性区議会議員だろうか。

目を惹く派手な顔立ちのためか、最近は、一般の雑誌などでも取材されているし、ネットでも話題を呼んでいる。憂鬱が少し吹き飛んだ。

「何でこのツアーをお知りになったのですか。あのホームページで、よくわかりましたね」

「いえ、この間、テレビでも下北再開発問題を取り上げていたので、ここの所、注意して検索したのです。それであのサイトに引っかかって」

「そうか。テレビの影響か。ふむふむ」

グラマラスな美人区議は、ボールペンを取り出し、手帖に何かを書き付けた。

「やっぱり強いわねえ、一般大衆には、テレビの影響」

(ちえっ、一般大衆かよ) と思いながらも、彼は見とれていた。

白いブラウスに黒いパンツといったシンプルな格好だが、彼の知らない外国ブランドらしく、全体のラインが、どこことなくスタイリッシュだ。胡麻塩頭の画伯と並んでいると、奇妙な組み合わせである。

こんなことなら、Tシャツにジーンズなどという貧相ないでたちではなくて、もう少しましな服装をしていればよかったと後悔した。

「あ、来た来た」と美人区議が小さく手を振った。

エントランスに、痩せた細縁メガネの男の影が現れた。ショルダーバックの中身を気にしながら、ひょいひょいと、軽い足取りでやってくる。

「そのサイト作った澤田さんです。塾の先生」

「あの、塾教師、ていうか……」とメガネの男は顎に人差し指をあてた。「いや、実は私、某国立大学の院生くずれでして。学問で飯を食おうと目論んでいたら、教授と合わなくて、人生曲がってしまったという、よくあるパターンの、なんとも情けない。特に謀大学の場合は……」

「その謀大学って、どちらなんですか」羽木務は、何の気なしに訊いた。

「まあ、いちおう」と澤田はいった。「いちおう、東京とか、ついてるような、しょうもない、いわゆる、日本の代表的な、税金の無駄使い大学でして」

すると美人区議が、突き放したような口調で、

「ちゃんと、東京大学っていいなさいよ、トーダイって。自慢なくせに」

「あ、またまたまたア、御厨女史は、そういうふうに、個人情報、勝手に、横流しするんだから」

痩せた塾教師は、片手を口元に当てて、照れ隠しのような笑い声を上げた。

もう時刻を過ぎているが、何人ぐらい集まるのだろうと、羽木は訝った。集団は苦手なので、これ以上増えない方がいいとも思う。

「お、マスター、登場だな」顔をしかめて、画家がいった。

色浅黒い、体格のいい中年男が「失敬」とでもいうように、顎に手をかざしやってきた。「昨日、友達が店に来て、四時過ぎまでどんちゃん騒ぎやってて、片付けに手間がかかってて」エキゾチックな顔立ちで、髭が似合う。太い首にはペンダント、腕にはブレスレットが光っていた。

「言い訳、無用」

にやりと渋く笑いながら、画家はいった。

「彼はバー『ロシナンテ』のオーナーさんよ。これでとりあえずメンバー揃ったのかしら。それにしても、暑いわね」

美人区議は、生白い首をあげ、片手に摘んだハンケチで、無防備に胸元に風を入れた。羽木務は、どきんとした。選挙の票の三分の一は、この色気で吸い寄せたに違いない。

そうこうするうち、さっきから奥でもじもじしていた二十代のカップルが、こちらに近づいてきた。「路地裏ツアーの方、ですか」と女がいった。

「ええ」と御厨区議。

「参加しても、いいですか」男は、気弱そうな笑いを浮かべた。

「もちろんよ」と区議。

お互いに挨拶を交わしたり、耳打ちをしたり、市民ホールの一画が少し騒がしくなった。——ふと、空気が、変わった。

牧田画伯が話を始めるらしく、持っていた旗を痩せた塾教師に渡して、後ろ手を組みながら、真ん中に一歩進み出た。

「ええ、牧田と申します。絵描きをやっております」

老画家は、メンバーを前に、あらためて話を始めた。

「ご存知の通り、小田急線下北沢駅前を、現在、何とも無骨な、高さ二三メートルの白い壁が囲んでおります。ちょうど、パレスチナのガザ地区を囲んでいるような、趣のない鉄のフェンスですな。線路脇にも、中から太い黒蛇のようなパイプがはみ出したり、泥まみれの瓦礫のような資材が積み上げられていたり、この町に似つかわしくもない、何とも荒涼とした、戦場のような、工事風景が展開しております」

羽木務は、少し離れたところで、二人のタウンホールの職員が、こちらを見ながら、ひそひそ話をしているのに気がついた。すでにロビーで缶コーヒーなどを飲んでいた一般市民が、面白がってこちらの方に耳を傾けている。

「ついこのあいだまでは、あそこでギターを弾いたり、大道芸をしていた若者たちも、すっかり、いなくなってしまった。そして、ラブソングやギターの調べのかわりに、鋼鉄の重機が、日々、物凄い音を立てている。これは、駅前再開発計画ということで、小田急線を、地下にする工事であります。ところが我々の調べによりますと……」

羽木務も、ネットや雑誌を通じて、ある程度の知識は入れていた。

幅二十六メートルというのは、環状七号線並の幹線道路だ。この道は、山手通りと環七とを結びつけ、交通量を緩和させるのだそうだ。牧田画伯の言うところによると、世田谷区は、小田急線の駅前再開発計画に強引に連動させて、六十年間も眠っていた計画を、いきなり復活させ、補助54号線という、幅二十六メートルもの幹線道路まで、作ることになったという。私企業と区の行政が手を結び、あえて何の工事か分かり難くしているようにも見える。

「しかも、その巨大道路——これは、米軍占領下の時代、昭和二十一年に計画された過去の亡霊みたいな道路計画で、かつてマッカーサー道路といわれていたものであります。この道路が、駅のすぐ東側、なんと、演劇の町、下北沢の文化的シンボルともいわれるスズナリ劇場や、その背後の斜面にあるカトリック世田谷教会を、完璧にぶっつぶします。さらに、線路を斜めに横切りまして、北口のいちばんシモキタらしい町並み、すなわち、ブティックや、アンティークショップ、古着屋や、エスニックレストランの並ぶ個性的な区域を、無味乾燥でだだっ広だけの、アスファルトのロータリーに、変えてしまいます」

「まあ、京都でいうならば」美人区議は、突き放した口調でいった。「町屋や祇園みたいな魅力的な小路を、いきなり壊しちゃうわけよね」

「そんな風景は、千葉や埼玉に行けば、幾らでもあるだろ」と、低く官能的な美声で『ロシナンテ』のマスターはいった。

「そう」と老人は、力を込めた。

「文字通り、文化破壊道路、神をも恐れぬ悪魔の道路で、あります。第一に、はたしてこの巨大道路が、すでに拡張工事を経ている井の頭通りの完成後に、本当に必要かどうかということ。第二に、この区のプロジェクトが区民に、つまりわれわれ納税者に、適切に情報開示されてきたのかどうか、ということであります」

「その通り！」

マスターは、自分の低い声の魅力を、十分に意識していた。

ステッキを持った小太りの老人は、マスターの顔を不快そうに眺めている。

「あの、すいませんが、政治的演説はタウンホールでは、遠慮していただきたいのですが」
いつのまにか背の低い中年男が、彼らの背後に立っていた。

「はて、なにか。私は仲間と、立ち話していただけですよ」

老人は、職員を睨み据えた。

熟練の寿司職人や、蕎麦屋の店主のような、気迫ある面構えだ。

相手は愛想笑いをしながら、「ここはどうか、ホール内はお引き取りいただきまして」と画家をエントランスの方へ促すような仕草をした。老人は、しばらく沈黙したあと、ごほん咳払いをして、「まあ、おいおい歩きながら、解説いたしましょう」

職員は安堵の表情をした。ロビーにたむろしていた市民たちはくすくす笑っている。

最初、何となく苦手感じていた羽木務は、この老人画家を、少し好きになっていた。

最後に遅れてきた男性が一人、慌てて駆け込んできた。痩せた背の高い人物で、のっぺりとした、眉の薄い、とりとめのない顔をしていた。髪が短いので、尼さんのようにも見えるし、白いナマズのようにも見える。

「ええと、これが今回の地図ですね。ちょっと文字が小さくて見えないかな」

画家に促されて、塾教師の澤田がバックの中の資料を取り出し、参加者に手渡した。白ナマズは、資料を渡されると、畏まってお礼をいった。

「それでは、みなさん、出発します」

牧田画伯は再び旗を受け取って、野武士のように厳かに歩き始めた。

一行は、それについてゆく。

通りの向こうの高台の緑がまぶしい。

羽木務は、地図の上の道路計画を、目で追った。新しく予定されている五十四号線は、駅の東側に斜めに走り、茶沢通りを突き抜け、町で最も古い劇場を潰してしまう。

「あの職員、私のこと知らないみたいね」

美人区議の御厨女史は、貰った地図を広げながら、不満そうにいった。

「いや、意識してるよ。さっきから奥で耳打ちしてたから」と、筋肉質のマスターが、片目を細くして笑った。太い首に下げた光りものが気になる。

「こんな有名人、知らないわけ、ないでしょう」にやにやししながら、塾教師の澤田も薄ら笑いを浮かべた。

茶沢通りのディスクユニオンというレコード屋の前で、一行は止まった。入口手前に、白い自動販売機がある。

「やはり再開発反対のグループ、セイブ・ザ・下北沢という市民グループのやっているTシャツ自販機です。まあ、これを着て運動を広げよう、闘おうということです」

自販機には、Tシャツのイラストレーターとして、黒田征太郎、リリー・フランキーなどの名前があり、彼らのデザインによるシャツが、缶コーヒーのように選べる形になっていた。これはかなり予算がかかる仕掛けだ。

渡された資料を読むと、反対運動の賛同者には、町内の居酒屋やブティックなどの老舗はむろんのこと、坂本龍一や、フジ子・ヘミング、よしもとばなな、本多劇場代表の本多一夫、他にも建築家や社会学者、都市プランナーなどの名前が並んでいる。驚いたことに、著名なドイツの映画監督ヴィム・ベンダースの名前まである。これらの文化人や識者、アーティストは、すべて駅前再開発と、五十四号線の工事着工に反対しているのである。

「世田谷区も、大変な計画に手を染めたことになりますねえ」羽木は、思わず呟いた。

「そうだよな。これをあえて決行すれば、文化に無理解な行政という烙印を捺されかねないだろう」と、マスター。

「こんなことやってたら、幾ら過去に立派な美術館や文学館を作ったとしても、すべて台無しということにもなりかねないって、区議会でもいってやったのよ、あたし」

御厨女史は、猛然と髪を掻き上げた。「どうも猪熊区長になってから、風通しが悪いわ」

「ヴィム・ベンダースには、誰かがこの運動への参加を、依頼したのですか」と羽木。

「いや、向こうから、自分で来たみたいですよ」と澤田。

「彼は、もともと日本好きだから。何かで下北沢の風景が変えられてしまうというのを、聞きかじったらしいのです。日本の友人も多いでしょうからね。『東京画』見ました？」

「ああ、残念ながら。『ベルリン天使の詩』は見ました。『東京画』には、下北沢、出ました



つけ」

「いや。でも、プライベートでは、よく来ているという噂ですよ」

陽がまた照りつけてきた。羽木は汗を拭った。まだ日本列島の北の方では桜が咲いているというのに、もうすでに初夏の雰囲気だ。

厳めしい顔をした銀髪の画家を先頭に、旗を掲げた奇妙な一行が、茶沢通りのカーブを小田急線の駅方面に進んでゆく。しばらく行くと、目の前に、老舗劇場のザ・スズナリが見えてきた。

「演劇の町シモキタザワ」を作り上げたといわれる本多劇場グループの最初の芝居小屋だ。

決して立派なビルではなく、小さなスナックの集合した飲屋街を抱えたひとつのコロニーのような建物である。地方の温泉町に残っている映画館やストリップ劇場のようだ。向かって右側に、細い鉄階段が突き出しており、そこを昇っていくと、二階の劇場に入ることができる。人気の劇団が芝居を打つときは、ここに列ができる。

羽木務は、大学時代にこの狭い芝居小屋でアングラ系の流れを汲む小劇団の演劇を見たことがある。何人かの女優や役者が、その後、テレビや映画で活躍している。

今回の「ツアー」は、たまたま偶然のきっかけで覗いてみたのだが、この下北沢は、羽木務にとっても特別な街だった。

大学時代、友達に連れられて初めて来たとき、ここは新宿や渋谷とも違う、何か小さな自治都市、手作りの解放区といった印象を受けたものだ。世の中は、ちょうどバブル経済の真っ盛りであった。

率直にいうとその印象とは、ジャズ喫茶やライブハウス、ブティックが街の基調となっている妖しい多面体の宝石であった。日常生活から浮遊した密度高い小宇宙のような街。この街を訪れた者の想像力を刺激するイメージの庭園であり、東京というコンクリートの瓦礫の中の文字通りオアシスであった。静岡県という穏和で保守的な地方出身の彼にとっては、これはほとんどカルチャーショックといってもよかった。

「ええ——。この有名なスズナリ劇場も、マッカーサー道路によって、潰されます」

旗を片手でなぞりながら、牧田画伯はいった。五十四号線を、あえてマッカーサー道路といっている。「第二期工事において、もののみごとに、潰されます」

天を仰ぐようにして目を閉じる。

「入ったことないのよォ、私ここ」

ブラウスの胸元をルーズにあけたまま、ハンケチで風を入れ、御厨区議が目を丸くしていった。

「そりゃ駄目だ。この町を語る資格、なしだ」

浅黒い顔をしかめ、ブレスレットをつけた太い腕を組み、髭のマスターが、おもむろにいった。どこで灼いているのか、全身がすでに褐色である。

「そうなのよォ。今度、何か見ておこうかしらね。文化行政のリサーチとして。何がいい。いまなにがワカモノに、受けてんの？」

そんな会話をしている二人は、何だか、個性派の女優と男優のようにも見えてくる。髭のマスターには、イタリアンマフィアの伊達男の格好をさせ、御厨女史にはベリーダンスの踊り子の格好

をさせ、仮装パーティーでもさせたら、この派手な二人にはさぞかし似合うことだろう。

すると、胡麻塩頭の牧田画伯は、ベテランの映画監督か演出家といった雰囲気だろうか。羽木がその思いつきを楽しんでいると、先程から黙って着いてきていたカップルが、デジカメで熱心に写真を撮っていた。

ふと、羽木は気を利かせたつもりになり、「撮りましょうか」といった。

「じゃあ、そこで並んで」

スズナリ劇場の前に立って、ぎこちなく二人は笑った。撮る瞬間、女性の方が顔を傾げて、唐突にVサインをして見せた。

「あるがと、ございマス」二人は笑って頷いた。

「あ、ひょっとして、韓国の人？」

「そうです。でもいま、日本に住んでいますヨ。ソシガヤ・オオクラ」

「そうなんだ」美人区議も口を挟んできた。「出身は、ソウルかしら？」

「ソウル。二人とも、ソウル」

「そうよねえ。何となく、雰囲気わかる」したりげに、御厨女史。

「アンニョン、ハセヨー」とつぜん区議がおどけていうと、「アニョハセヨ」と相手も素早く応え、日韓の女同士で、笑いあった。

「観光に、なると思っで」若い男は、人なつっこい目をして、穏やかに頷く。

「ええっ、これが——。市民運動のツアーが？」

羽木は、そういいながら、デジカメを戻した。

「シモキタザワ観光ですよ。町の詳しい説明が、つくでしょ。彼女、頭いいね」

男は、体を反らし、感心したように女を眺めるポーズをして、褒めてみせた。

女は、恥ずかしそうに両手で顔を覆って、いきなり男を横から突き飛ばし、韓国語で何か鋭く抗議しながら、恋人を睨みつけた。

]男は鷹揚に笑って「もう、これですから」というような顔で首を振ってみせた。なかなかいいカップルだ。

「朴といます。ヨロシク」

「金と、います」

二人は自己紹介をした。

スズナリ劇場脇の小路を曲がり、数軒の鄙びたスナックを横目に進むと、フェンスで仕切られた緑の敷地があった。まぶしいほどの若葉が、いきなり目に飛び込んでくる。小径は緩やかな斜面になっており、奇妙なカマボコ形の建物と、住居らしいアパートがあった。

建物の入口には薔薇のアーチがあり、季節が訪れれば薔薇に被われ、さぞや美しいことだろう。小高い斜面の上に、陽を受けた教会の白壁が見えた。

幾つか並ぶ縦長の窓に、彩色されたステンドグラスが嵌められている。

古風な白壁と、新緑との対照が、息を飲むほどだった。すでにこの二三週間で、樹木は夥しい葉を繁らせ、空を覆う新緑の密度がいつそう濃さを増していた。

柔らかな色の草が繁る道を一行はゆっくりと上がって行った。

彼らはすでに、カトリック世田谷教会の敷地内に入っていた。

そこには、不思議な空間が広がっていた。右手には、聖ヨハネ礼拝堂と称するロマネスクふうの聖堂があり、多角形の屋根には小さな十字架が立っていた。

高台になった中庭の左手は、広々とした草地になっており、奥には幅十メートル以上の蒼灰色の岩崖が迫っていた。その芝草の広がりの半分を、大きな樹木の影が覆っており、陽が直接当たる明るい草地が金緑色に輝いている。

小田急線の線路からさほど離れていないのに、空気の質がまるで違う別世界だった。とりわけ目を惹くのは、その崖だった。真ん中に大きな半円形の洞窟があり、四角い祭壇のような石の台が設えてある。その右上方の小さな洞に、青い衣をまとった聖母マリアの像が、天を仰ぎ祈っていた。異国的な不思議な静けさに満ちた一画だった。

茶沢通り沿いのスナックや、飲食店、レコード店、古本屋などの雑然とした風景を見慣れていた一同は、茫然としていた。

「こんな場所が、あったの。知らなかったわ。向こうの坂道は、何度も通ってきたのに」

御厨区議は、かすれたような声を出した。

彼女の手前では黄色い蝶が二羽、戯れるように飛んでいた。

「俺も、下のスナック街までは、よく来るんだが」髭のマスターも呟いた。

「ええ」と、老画伯は咳払いをして、芝生に旗を突き立てた。「ここは、世田谷では戦後、最も古く作られたカトリック教会です。こちらの十字架のある建物が聖堂です。もともとは別の場所に建てられる予定で、はるばるフランスから運び込まれた建材が、戦争で一時中断になり、ここに移ってきたそうです。クリスチャンではないのですが、私もこの聖堂は好きで、何回か油絵に描いております。向こうの坂道から見ると、この庭からの眺めが美しい」

画伯は旗を斜めに握りしめ、奥へと歩いていった。「さて、この洞窟を見てください。これ、どこかで見たことがありますか」

「ルルド、じゃないかしら」区議はいった。

「そう。フランスとスペインの国境近く、ルルドの泉で有名な町ですね。十九世紀の半ば、村の幼い牧童たちが、聖母マリアの顕現を見たと言われるルルドの洞窟を、模しているわけです。バチカン公認の奇蹟ですね。この洞窟祭壇の様式を、通称ルルドといいます。カトリック教会の庭にはどきどき見かけられますが、ここはかなり大きい」

「まあ、カトリックはどこか、日本の神道や仏教と近い土俗的なものがありますからね」

澤田は一人で頷いている。

羽木務は真下まで行って、聖母の像を見上げた。岩の上には低木や蔦が生い繁っている。

「しかも、これらはすべて、信者さんが協力して手作りで作ったそうです」

韓国人カップルは、男の方が日本語に習熟しているらしく、彼が解説する度に、彼女が神妙な顔で頷いている。男性は、光の角度を確かめながら、何枚か写真を撮った。

「戦後すぐ、近くのプールが壊されたままになっていて、その残骸が積み上げられていた。そのコンクリートの廃材を積み上げて、ここまで立派なルルドを作ったそうです。結婚式や、いろいろな教会のセレモニー、フリーマーケット、パーティーなどでも使われている美しい庭です」

牧田画伯は、そこで少し疲れたように目を細め、キャップを取って、頭を扇いだ。

髭のマスターはもっともらしげに首を振り、美人区議は感銘を受けたのか、ハンケチで口を押さ

えていた。

「――例の幹線道路は、ここを通るのです」

塾教師の澤田が、不意にそう断言した。

眉をぴんと釣り上げ、細縁メガネの奥で鋭く目を光らせている。

「スズナリ劇場を潰してからこちらに伸びて、いまわれわれがいる場所を、見事に突っ切るはずですよ。幅二十六メートル、環七並みのでかい車道がね」

一同から、たちまち小さな悲鳴やブーイングが上がった。

ふと、羽木が気づくと、最後に遅れて参加してきたのっぺりとした白ナマズのような男が、携帯をこちらに向けて撮っている。何かの記念だろうか。撮り終わると澄ました表情で、後ろ手を組んで佇んでいる。

「ひどいわ。マリア様の庭に。何とも罰当たりな計画ねえ」と御厨女史。

「これはねえ、クリスチャンだけの問題ではない。世田谷区の行政が、精神的遺産というものを、どう考えるかということですよ。いわば文化財でしょう、この風景は」

老画家は腰を庇いながら、険しい目で一行を睨みつけた。

「文化財ねえ。ウチは浄土真宗なんでね。ま、どうでもいいことだが。日本人は仏教だろ」小太りの老人が、ステッキで芝草を突きながら、わざと聞こえるような大声でいった。

さっきの黄色い蝶々が、追いかけてこをしながら、木の枝を透かして青空へと舞っていった。日光の中で、きらきらと輝く小さな金の環に見えた。

木洩れ日が芝草の上に淡い紫の模様を投影している。

「あそこに、少し突き出した家があるでしょう。あれは、フジ子ヘミングさんの家です」

澤田がすぐ隣にいた羽木にいった。

「ああ、ピアニストの」

「そう。ピアニストの家の前を、交通量の激しい道路が通ることになる。ときどき綺麗な音が聴こえてきましたが、やがてそんなことも、なくなるでしょう」

淡い春の雲が、枝々の間を流れていく。

岩陰の聖母マリア像にも、陽が射していた。

「ハギサン。スミマセン。また、お願いシマス」

いきなり、韓国人カップルにデジカメを手渡され、羽木務はびっくりした。

穏やかな微風が中庭を渡っていった。

二人はすでに、聖母マリアの洞窟の前に並んで、顔をぴったりと寄せ合って、共に指でVサインを示し、白い歯を見せ、大袈裟な笑顔を作っていた。



霞むような晴天の中、鉄が匂っていた。遮断機が、ゆっくりと立ち上がった。

「下北沢路地裏ツアー」の一行は、交番前の踏切にさしかかった。

新宿駅方向には、代々木上原の住宅街を超えて、遠く青紫色の高層ビル群が霞む。赤錆に縁取られた白銀色のレールが、幾条も春の陽を浴びながら伸びている。

くたびれたような午後の日射しが、白っぽい土埃に汚れた砂利に照りつけていた。

踏切の西に下北沢の駅構内が見える。灰暗いプラットホームに、電車を待っている人々。構内を通した遠景は、トンネルの向こう側のように白く明るい。駅側面の風景は、殺風景な白いフェンスで囲まれていた。

半年前は確固として存在していた建物が、いまではすっかり取り壊され、そこだけぽっかりと空虚な青空が見えている。この再開発計画では、駅全体を地下にするという。しかし、いまだに駅ビルにするのか、駅舎だけにするのか、その具体的なイメージも発表されていない。行政側にも影響力を持つ私鉄企業の駅前開発では、毎度ながら地域住民には何も告げられず、どこかの会議室である計画が決定され、それは絶対的な効力を持つ。しばらくすると、白っぽい大型の建造物が、次々と建てられてゆく。その一方で、懐かしい古風な町並みが、櫛の歯が抜けるように、人知れず壊されていくのだった。沿線住民は、大企業の前に常に無力だった。

間もなく赤いシグナルが点滅し、甲高い警報が鳴りはじめた。

「駅前のロータリーができると、おそらくは、いまの町田みたいな風景になるのでしょう」踏切を渡り終えた一行に向かって、老画家は溜息をつくように、いった。

「この辺を、でかいビルが囲むわけだ……」と羽木。

「そう。渋谷や新宿辺りから、大手資本が進出し、高さ七十メートル、地上十七階もの高層ビルが林立する。巨大な駅ビルを中心としてね。ロータリーでは、タクシーやバスが回り込み、効率よく人間どもが運ばれる」

画伯はおもむろに、顎髭を撫でた。

「シャネルや、ヴィトンの店が入るかも」と御厨女史がいった。

「何だよ、まんざらでもなさそうに」と髭のマスター。「しかし、味もそっけもない町になるな。もちろん、その暁には、ウチのバーも出て行くことになるがね。常連ともども」

「あら、民族移動みたいな言い方ね」

「そうさ。まさにエクソダスだ」

「さあ、そろそろ駅前市場に入りましょうかね」

世話人役の澤田が、片手を上げて一行を手招きするような格好をして見せた。

「どこ、お住まいですか」澤田が、歩きながら話しかけた。「近い世代でしょ、ウチら」「喜多見です」と羽木は答える。「世代ねえ。世間でいうところの、オタクってやつ?」「フッフ。そうね。喜多見は野川もあるし、緑の多い良い所ですね。成城学園の隣だしね。大学時代、シモキタに住んでいたのですよ。一番街のちょっと北に入ったボロアパート」

「僕もこの街に住みたいとは思ったのですが、何だか飲み込まれそうでね」

「飲み込まれる?」

「生活が。つまり、毎日この街で飲み歩いたり、女に惚れたり、友達と会ったりで、たちまち時間が過ぎてしまう。いわばここは、小さな御伽の国です。じっさい、僕の先輩にも、この街に住み着いていつのまにか、四十になり、五十になり、それでもまだ青春が続いていると錯覚している夢見る中高年、という人がいっぱいいます。皆、サラリーマンや役人ではなく、編プロをやったり、イベント企画の会社をやったり、ヤクザな商売で食いつないでますが。なにしろ、この不景気だしね」

「わかる、わかる。一度この御伽の国に住むと、他の街には住めなくなってしまうんだ。かつての神童、今ではしがいない塾教師のオイラも、まあ、似たようなもんだし」

駅の脇の左手に入ると、そこは不思議な下北沢北口食品市場、通称、駅前マーケットの空間が始まっていた。

屋根は低く、通路は狭く、戦後すぐに発生した焼跡闇市の雰囲気やいまだに残している、いまや東京でも数少ない場所だった。天井にはトタンやベニアがひしめき合うように組み合わせられ、さながら舞台裏の天井のような雑多な構造を顕わにしている。

意外にも二階の窓辺などにはモダンな装飾が施され、随所に昭和の残り香を感じさせる。路地は半世紀もの間、夥しい人間たちに踏みしめられ、奇妙な光沢を放ち、陶器のような緑がかかった鼠色を帯びている。小さなカスバ、香港九龍城のようなその内部には、ついこの間までは、干物、乾物、野菜果物、食器陶器や手袋や足袋やバッグ、袋物の類、駄菓子や日用雑貨などを小売りする露店のような小店舗が並んでいた。

しかし、駅前再開発計画によって、大方の店は多少の金を握らされて追い出され、いまは期限付きで内部を改造した飲み屋などに活用されている。

「しかし皮肉なことに、あと半年しかやらない、一年しか営業しないというところに付加価値が生じて、小さな焼鳥屋や居酒屋が、いま雑誌に取り上げられて大流行なのです」

牧田画伯は旗の端を撫でながらいった。

「この市場の中は、私も昔から馴染みで、知り合いの店もいくつかあります。最近の若者の発想は大したもの、廃屋同然の店を、お洒落なワインバーに作りかえたり、ユニークな和食レストランが出現したりと、なかなか連中、クリエイティブですな」

「この店なんて、懐かしい作りね。大正十四年からあるお団子屋なのね」

御厨区議は、腕組みをしながら看板を見上げた。その店は、ガラス戸で囲まれた間口の狭い店で、カウンターやテーブルが覗いていた。

「じつはここ、『うさや』といって、竹中直人主演の映画セットを、そのまま飲屋にしてるん

です。二階もどこかの民家みたいで、いい感じですよ。看板にある団子とかまんじゅうとかは、実際には関係ありません」澤田が流暢に語り始めた。

韓国人カップルが、格子状になったガラス戸を覗いている。

少し離れた所で、例の白ナマズが、携帯のカメラで撮影していた。風景ではなく、人間を、撮影しているのだろうか。羽木は訝しげに彼を見た。長身だが、どこことなく冷酷な尼僧のような顔立ちだ。楕円形の小窓からは、今夜のための支度をしている二十歳ぐらいの女が見える。壁には横文字のメニューが手書きされている。

「もっと奥へ、参りましょう」

牧田画伯は、髭に覆われた厳めしい顔を反らして、悠然と進んでいった。

仄暗い路地の壁にはバッグが吊され、木箱の上には足袋や、靴下、雪駄等が並んでいる。薄暗い店の奥で、老婆がひっそりと座っていた。狭い壁の隙間に、洗濯物が干されている。まるで東南アジアのバザールだ。ここに住んでいる人間もいるのだろうか。かすかに黴臭い。平成の日本ではないような褐色に沈んだ空間は、空気の質まで違っていた。

「汚いねえ、きたない、きたない」ステッキの老人が、吐き捨てるようにいった。「ボヤでもあったら、どうすんだろねえ」

「あの角に、以前『せっちゃん』というおでん屋があつてねえ」髭のマスターが、老人にはとりあわず、懐かしそうにいった。「せいぜい数人が入れるような狭い屋台。劇団関係者には有名な店だよ。ワラジという、どでかい厚揚げがうまかった。明け方まで、よくその角に椅子を並べて、肩をくっつけ合って、若い連中が騒いでいたっけ」

「ロシナンテから流れていくパターンとかね」と、区議。

「あつた、あつた、そういうこと。夜の二時頃に店を閉めて、俺も一緒についていった」

このマーケットを囲む薄い壁をひとつ隔てて、駅がある。おでん屋の屋台のあつた角を廻ると、アンテナが斜めに突き出た小さな二階建ての小屋があり、細い鉄の階段が突き出していた。ほとんど櫓のような小さな箱形の建物は、すでに鮮やかな緑の蔦に厚く蔽われていた。迷路の中の幾つかある通路には、軒並みシャッターが閉じられた店舗が並ぶ。赤錆びた壁面には、演劇やライブの広告が何度も貼られ、剥がされ、また重ね貼りされたぼろぼろの跡が残っていた。ほとんど半分以上の店が、すでに営業をやめていた。それでも路地裏からは、夕暮れに向けて準備を始めた焼き鳥屋の香ばしい匂いが漂っている。

「さて、この駅前マーケットも再開発で、すっぱりとなくなるわけですが、行政側と小田急電鉄の狙いは、駅周辺の五千平米のスペースを、広大なロータリーにすることです。幅の広い道を造ることにより、法律上、周囲に高層ビルを建てられることになる。六十メートル、十七階のビルの群れです。実はここにこそ、彼らの本当の狙いがある」と老画伯。

「つまり、交通量緩和なんてただの建前。連中は駅前に、町田や渋谷みたいな大型ショッピングモールや、デパートの箱物を作って、収益性の高い土地利用がしたいわけよ。そのためにわざわざ血税を使って、いらぬ幹線道路まで造ろうとしてるわけ」

御厨女史が、豊かなバストの前で腕を組んだ。

「あの、僕は、防災上の問題だって、聞いてたけど」羽木は口を尖らせた。

「こんにちは。素朴な、世田谷区民の皆様！」澤田が、皮肉っぽく冷笑した。「そんなわけ、な

いでしょ。一体、いつ、どんな火災があったんですか、この駅前市場付近で。下北沢で、大火事があったことが、ありますか」

「たしかに」羽木はあっさりと、納得した。

「あんたらサ、そういうけどね」不意にステッキの老人が、我慢しきれずに甲高い声で口を挟んだ。「これからもないと、断言できないだろ。安全なことに、越したことはねえんだ。それに、住民の意志だって、再開発を望んでいるじゃネエか」

「貴方がいうのは、地権者のこと、ですかな」

牧田画伯が、穏やかにいった。

「住民と言ったら、住民なんだよ。なあに。地権者だろうと地主だろうと、立派な区民ですよ。この辺で、ロクに働きもせず、ふらついてる若者と違ってサ、税金をたんまり払ってるんだ」老人は、厚い下唇を突き出し、画家を睨んだ。

「爺さん。ロータリー予定地の地主ではない地域住民は、どうなんですか。つまり、再開発で、たんまり金が入ってこない人間は、全然、同意してないでしょう。というよりも、このままの雑多な街並みを愛しているわけだ。それとも、土地持ちでなければ、風景について物言う権利はないとでもいうのかい。……あんたらは、土建屋行政から、美味しい餌で一本釣りされてるだけさ」

老人よりも頭ひとつぶん背の高い、イタリアの伊達男のようなマスターが、濃厚な美声に多少の凄みを利かせていった。するとステッキの老人は、慌てて目を逸らした。

ロクに働きもせずふらついてる若者という一言にかちんと来た羽木は、内心快哉を叫んだ。実際のところ、不景気で仕事の少なくなったフリーのライターなど、ほとんど引き籠もりのニートに等しいだろう。

でっぴりとした老人は、厚い下唇を突き出し、ハンチングを被り直した。

「まあ、いいじゃないの。ここで議論することないわ。いろんな人がいるわよ、世の中」

「ほう、あんた、美人だねえ」老人は、急に目を細めて、御厨女史の顔を覗き見た。

「まあ、ありがとうございます」

区議会議員は、丁寧に頭を下げてから、マスターに向かって意味ありげにウインクした。

「議員さんかね。大したもんだ。推進派を敵に回して、ジャンヌ・ダルクみたいだねえ」

話題が逸れて助かったという顔をしている老人を見て、羽木は、ぷっと吹き出した。



《下北沢路地裏ツアー》の一行は、駅前マーケットを過ぎて、やがて北口の雑多な一画に入り込んだ。春らしい天気の良い日だった。すでに住宅街の庭には、紫色のモクレンや、白いハナミズキなど季節の花が咲き誇り、華やかな色彩にあふれていた。

この周辺は、もともとは住宅街だったけれども、現在ではブティックや古着屋、アンティークショップ、それにフレンチやイタリアン、アジア系の小さなレストランなどが建て込んでいる。

いまから三十年以上も昔、アジア各地やヨーロッパを放浪していた若者たちが、帰国してから、比較的地価の安いこの辺りに輸入雑貨店や古着屋や一風変わったバーを始めたというのが、この不思議な風情の漂う一画の経緯らしい。つまり店の初代オーナーたちは、かつてビートルズやローリング・ストーンズに入れあげていたヒッピーやフラワーチルドレンの成れの果てなのだ。そして、同世代のとりあえずはネクタイを締めて体制に復帰したサラリーマン達が、それらの店を、経済的に心情的に脇から支える常連客となった。

このような次第で、商店街の価値観とも、市民のそれとも異なった独特の解放的な意識が、ここでは狭い路地裏の石ころや苔にまで染みついている。

日曜なので、路地という路地を、若者たちが思い思いの格好で、そぞろ歩きをしている。路地裏から次の路地裏へ。この町を訪れる若者たちは、まるで岩や藻の中を泳ぐ回遊魚のようだ。樹木も多いので、ツアー一行の顔が、日向になったり、日陰になったりを繰り返した。

牧田画伯はときおり、店の主人や店員たちに声をかけられる。老画家は、その度にかすかに微笑し、軽い挨拶を返していた。大きく枝を張った楠のあるマンションのベランダでは、部屋の住人らしい若い外人男性が、ギターを弾いて得意げに歌を唱っていた。その下を若者たちが、紙袋を下げて、けだるそうにぞろぞろと歩いていく。彼らと目が合うと、金髪男性は、上機嫌で投げキスを返して笑って見せた。いま住んでいる部屋が気に入っているらしい。

この辺りでは、昭和三四十年代に建てられた路地裏の木造民家が、そのまま二階建ての和風フレンチの料理店に改造されたりしている。

ブロック塀には、いつものメニューが記され、魔女の腕のような枝に吊るされた黒板に、本日のお薦めの牡蠣が、白いチョークで手書きされていた。玄関脇の木箱には、数本の濃緑に輝くワインの瓶が並んでいる。

鉄の装飾のついた窓の中、ひっそりとした仄暗い室内に、アールヌーボーふうの緑やオレンジの花型ランプが見える。常連客たちはパンを指でちぎり、肉料理にナイフを入れながら、ひそひそ声で語っている。奥には網目のある旧式の蓄音機や、黒い扇風機が覗いていた。

木陰のテラスにパラソルを立てた外テーブルでは、三十代前半ぐらいの二人連れが、ちょうどワイングラスの縁を接しているところだった。

「駅前ロータリーは」と牧田画伯は、窄めた旗で指し示した。「ちょうどこの辺りの幅まで、フラットなアスファルトにしています。六十年かけて、できた風景ですがね。車が入り込み、さっきの十字路の辺りでいちばん太くなります。バスやタクシーが回り込むでしょう」

参加者たちは、重苦しいものを感じていた。

「それって、自然破壊、環境破壊に近くない？」御厨女史は、訝しげにいった。

「ですよ。林道を一本通すと、周囲の動物や野鳥たちが、死滅するみたいだ」と羽木。

「土建屋行政の最たるものだ」とマスター。「ダムや道路などいつもの公共事業の手口だけど、とりあえずどんどん工事を進めておいて、後戻りできない状態にするわけだ」

「国交省の天下り官僚を加えた諮問委員会の見解を、区民の意見だということにしてね」

舌打ちしながら澤田がいった。

「しかし、なんだナ」むっつりと黙り込んでいたステッキの老人が、下唇を突き出した。「ああいう、民家を使った小料理屋なんざ、自分達は、気の利いたことやってるつもりなんだろうが、不衛生だわな。昔の家の黴臭い台所を、そのまま使ってんだろ？ ネズミだって出るし、ゴキブリだって混じってる。ヤダネー。どうして、どうして。あんなもなア、食べられたもんじゃないヨ。あたしゃ、ちゃんとした、モダンなビルの店の方が、好きだね」

「爺さん、どこの店で、ゴキブリが入った料理を出したって」ロシナンテの店主が睨みつけた。

「こら、証拠出せよ。こっちも一応、食いもの屋なんでね。いい加減なこといってると許さないぜ」

「な、なんだよ。例えばの話さ。例えばの話だよ」

老人は、慌ててそっぽを向き、ハンチングを取って、膝の辺りをぱさぱさと叩いた。

棕櫚の樹や、ぎざぎざのヤツデの木に囲まれた洋館もどきの家。民家の裏手を通り抜け、軒先をくぐる。

猫や犬や、世田谷一帯に棲み着いているというハクビシンや狸が夜中に通り抜けるような道に入る。

うっすらと苔に被われた石畳に、古いブロック塀。そして、垣根から覗く物干し竿や赤い三輪車。やがて彼らは、住宅と店が入り組んだ小路を過ぎて、再び、思い思いのファッションを着こなした若者たちの多い路上に戻った。

以前、何十代もの車が入る大型ガレージとして使われていた建物に入る。

いきなりラップ音楽が大音響で飛び込んできた。そこには洞窟の中の迷路のように、雑貨屋やアクセサリー、ファッションの店舗が、所狭しと入り込んでいた。極彩色の古着が葡萄棚のように吊り下げられ、照明に照らされて立体的に浮かび上がる。

太い鉄骨が剥きだしのままの天井や、落書きのある壁には、安物の首飾りや宝飾品が吊り下がり、鏡に映されて輝いていた。どこを見ても、光と闇とけばけばしい色彩が、万華鏡のように縋められている。赤や桃色、水色や黒、女性物の下着は、薔薇やポピーのように、花ざかりだ

った。

それぞれの店は、小動物たちがこしらえた地下の巣穴のようにも見えた。

コンクリートの通路には、かつての車庫の表示らしき白線や矢印の跡が、色褪せたまま残されている。茶髪に染めた若い女たちが、澄まし顔のまま、軽くラップのリズムに身をゆだねるようにして、ネックレスを並べ変えている。彼女たちの細く尖った爪先には、小さな花や星が描かれていた。

隣の店では、フランケンシュタインやドラキュラなどのグロテスクな仮面や、ポップアートのようなオブジェ、怪獣たちのぬいぐるみが並べられ、こちらを覗んでいた。

一行は、まるで初めて地下世界を捜査する探検隊のように、好奇心を剥きだしにして店を覗いていた。韓国人カップルは何か買うつもりなのか、店員と交渉を始めた。

「若い人の発想って、凄いわねえ。こういうアイデア、あたしの選挙に活用できないかしら」区議会議員が、仮面の赤い鼻に触れながら、呟いた。

「そういう遊び心のない人間には、無理だね」と、バーの店主。

「では、こちらに向かいます。迷子は、いないよね」老画伯が、穏やかに笑う。

「あら、あの方、大丈夫かしら」

ふと見ると、例のステッキの老人が、具合が悪くなったように、通路にしゃがみ込んでいた。青紫色の髪の少女めいた女性店員は、店先に蹲った老人を、不快そうに眺めていたが、助けようとはしない。

「いや、ちょっとね」

額に汗をかいて、ふうふう荒い息を吐き、苦しそうにしていた。「よくあることなんで」御厨女史が背中をさする。朴と金の韓国人カップルも、心配そうに覗き込む。

老人は、むりやり笑顔を作り、何とか持ち直して立ち上がった。「こういうところは、駄目だな」

ステッキの老人は、皆から途中で帰るように促されたものの、頑として聞かなかった。意地になっているのか、持病から来るいつもの発作だという。多少迷惑ではあったものの、参加続行ということになった。

《下北沢路地裏ツアー》の一行は、地下洞窟のような極彩色ガレージを抜け、エレベーターに乗った。何階か上昇し、ドアが開く。すると、何の変哲もない単調な通路に出た。窓のない長い長い廊下を過ぎ、折れ曲がり、ドアを開け、トイレの横の角を過ぎると、どうやらスーパーの一画に着いたらしい。

一つ向こうの明るいフロアでは、近所の住宅街に住んでいるような主婦やサラリーマンたちが、野菜やパンや麺類を入れた籠を下げて、レジで並んでいる。ここではすべて、白っぽい無機質の照明に照らされていた。まるで地下の異次元世界から、日常空間へと戻ってきたように思われた。二つの世界は、通路で繋がっていたのだ。

一行は、通路を出て外の景色の見える開放的なガラス窓の前に立った。

「ほらあそこ。下に見えるのが、駅前マーケットです」澤田が、手をかざした。

大きく張り出したガラス窓から、さっき歩いた赤錆びた迷路、焼跡闇市時代から続く駅前マ

ーケットが見える。ただし、ほぼ真上からの視界のため、無惨なトタン屋根が、赤錆色やブルーのコーラージュを貼り合わせたような貧しいバラックが見えるだけであった。

ある感慨が、一行を支配した。

確かに、汚いのである。みっともないのである。しかし、このトタン屋根の赤錆や、風雨の跡の破れ目は、戦後日本の歴史であり、象徴そのものではないだろうか――。

「行政と電鉄は、これを撤廃して、おそらく巨大な駅ビルを建てるのでしょう。その中には、ショッピングモールあり、映画館やシアターあり、コンサートホールやギャラリーまであるかも知れない」

「ヴィトンやブルガリもね」皮肉っぽく、御厨女史が加えた。

「アコムや武富士、ドコモやマクドナルド。その他、駅前定番ショップもな」とマスター。

「つまり、本日、私たちが歩いてきた万華鏡のような風景は、あとかたもなく、煙のように消える。そして大手資本は、文化の街、若者の街というブランドだけをまんまと頂戴して、体温のある地域のコミュニティを分断させ、手作りの感触を抹殺するでしょう」

牧田画伯は、緑色のツアーの旗を、カチンと突き立てるようにしていった。

「そしてきっと、ショッピングモールの中に、昭和のレトロな街を、わざとらしく再現してみせるんだわ」

「――さてと、疲れましたな。あんたじゃないが、老人に長旅はこたえる。そろそろ、お茶にしますか」牧田画伯は、ステッキの老人に微笑した。小太りの江戸っ子は、ぎこちない笑顔を作った。



路地から、路地へ。壁の間を通り、その奥の細道へ——。
 どこをどう巡ったのか、羽木務は見当がつかなくなってきた。疲れたといっておきながら、牧田画伯は他のメンバーなど一向に介しないような表情で、すたすたと歩き続けた。落書きだらけの壁、雑居ビルの絡まり合った配線、狭い空。似たような風景が、何度も現れた。

何だか半径数十メートルの迷路のような区域を廻っているような錯覚に陥った。

「ではここで、休憩します」

といて、牧田画伯が指差したのは、小さな細い路地の行き止まりだった。

前方には、蔦の這いまわる陽当たりのよい壁が見えるだけだ。一行が進んでゆくと、かすかに小鳥の啼く声が聞こえた。そして、緑色の蔦の葉に蔽われた、古びた木の看板が見えた。

『閑話茶館』

緑の壁面の手前まで来ると、右手が急に明るく開けて、不思議な空間が広がっていた。それはがらんとした簡素な中庭だった。小さな池の奥に藤棚があり、紫色の藤の花がひっそりと垂れている。色褪せた木の露台があり、簡素なテーブルが春の陽を受けて並んでいた。飴色の大きなどっしりとした壺があった。奥は、店のような構えとなっており、薄暗い中にカウンターのようなものが見えた。

とりわけ印象的なのは、軒先や木の枝のあちこちに吊り下げられている大小様々な鳥籠であった。青紫や黄緑色の羽をした小鳥たちが、竹櫛を編んだ繊細な工芸品のような籠の中で、美しい声で啼いている。その声が何ともいえない華やぎを与えていた。

晩春の昼下りの日射しを受けて、池面はなめし革のような鈍い光を帯びて、ゆるやかにゆらめいている。光は白い漆喰壁にけだるく照り返している。

水草の藻がときおり揺れるのは、水の中の鯉がつつくためだろうか。水面では、大小のアメンボが、細い脚を張ってじっとしていた。まるで時間が止まったような空間であった。下北沢にこんな所があるとは、羽木務も聞いたことがない。

籐椅子に横になっていた人物が、顔に被せていた本を置き、むっくりと体を起こした。

「おお、ご到着ですか。おひさしぶりです、牧田先生」

丸顔の小柄な老人は、にこやかな笑いを浮かべて、一同に挨拶した。

「お元気ですか、候さん。ご無沙汰してます」画家は、キャップをとって挨拶した。「この連中に、お茶を飲ませてやってください」

「かしこまりました。皆様、いらっしゃいませ。ただ今、飲茶の用意をさせます」

候老人は身を屈め、歓迎するように手を差しのぼす。「さ、さ。どこにでも好きなように、座ってください。奥にも椅子がありますから」

老人は、肌の色つやが良く、まるで満月のような黄色い顔だった。

彼が「アイリン！」といて、ぱちんと両手を打つと、すらりとした若い女性が、カウンターに

現れた。薄くて白い清楚なチャイナ服姿だ。しばらくすると、中国茶の道具一式をそれぞれのテーブルに設えた。そしてかすかに笑みを浮かべつつ、しなやかな手つきでお茶を淹れ始めた。

「候さんは台湾の方でね、日本や中国を行ったり来たりして、貿易のご商売をされています」と牧田画伯。

枝垂れ柳の木が、陽光を受けてゆるやかなS字を描き、水面すれすれに数本の枝を垂らしている。細い鎖のような葉を透かして、金緑色の光がにじむ。

「台北や上海にも幾つか家があるという、大変なお金持ちです。私も数年前、その豪邸の一つに泊まらせてもらったことがあります。断崖絶壁の上から遙か東シナ海が見渡せるという、何とも広大な邸宅です。東京にもこうして時々やってくる。この茶館は、開いている時と、閉じている時があり、今日は君たちは、とても運がいい」

「徳のある方だけ、私のお茶は飲むことができます」候老人は、にっと笑った。「いまこの娘が淹れているのは、阿里山にある私の茶畑のお茶ですね。標高三千メートルに近い村です。昼と夜の寒暖の差が大きいので、美味しいお茶が採れる。一煎、二煎、三煎……。どうぞ、何杯でも何杯でも、ゆっくりと心ゆくまで楽しんでください」

藤棚に吊された籠のカナリアが、素速く向きを変え、露台の影模様を変化させていた。

「ほんとうに、素晴らしい庭園ですわ」女性区議が、感に堪えたように辺りを見回す。「このお店で、私の講演会とか開けるかしら」

「残念ながら」と候老人は、悲しそうな顔をした。「ここは、無駄話、閑話、役に立たない話だけオーケーね。お金になること、政治の話、企業のやり口、世の中に有用なこと、そういうことを話すと、この場所は煙のように、消えてしまいます。ここは、無用の場所、無為の庭」

黄色い丸顔をした老人は、ふっと、謎のような笑みを浮かべた。

羽木務は、御厨女史やロシナンテのマスターと三人で、池に近い木のテーブルを囲んでいた。

「あのアイリンちゃんとかいう素敵な子、何者かしらね。孫でもないでしょう？」

御厨女史は、照れ隠しのように話題を換えて、羽木にささやいた。

「さあ、向こうから連れてきたのかなあ。それとも留学生なのかな」羽木は首を傾げた。

「ひょっとして、若すぎる愛人か。あの台湾美人」ロシナンテのマスターも加えた。「柳腰というのは、ああいうのをいうのかねえ。隅に置けんぞ、あの爺さん」

牧田画伯は、目を細めてお茶を啜りつつ、彼らのやりとりを楽しんでいる。やがて気分よさそうに、パイプを取り出し、火を点けた。

他のメンバーには相手にされないと思ったハンティングの老人は、韓国人カップルをつかまえて、藤棚の下のテーブルで話し込んでいた。ステッキを斜めに立てかけ、身を乗り出すようにしている。二人のソウルっ子は、多少迷惑そうな顔をしていたが、儒教的な律儀さからか、生真面目に老人につきあっていた。

白ナマズは、相変わらず一人無言で、携帯電話のカメラで風景を撮影している。面白くも何ともないという無表情で事務的な顔であった。しかし時折、牧田画伯や、候老人にもカメラを向けているのを、羽木務は見逃さなかった。

このアジア的とも西洋風ともつかない奇妙な中庭は、ほぼ正方形で、四方が他の建物の背中にな

っているらしく、灰色のコンクリートの壁や、びっしりと蔦の被う緑の壁面、古い赤レンガの壁で囲まれていた。西側の壁際には、小さな赤い薔薇や、さんざしの白い花が微風に吹かれていた。

ふと見ると、どこから吹かれてきたのか、黄色い蝶が二匹、もつれ合うように戯れている。光の中で、くるくると回り、金のリングのように見える。さっき教会の庭にいたのと同じ黄色い蝶々だった。まるでどこか見えない近道があって、こちらに飛んできたようにも思われた。

「あの、質問していいですか」羽木務は、茶碗を置いた。

「どうぞどうぞ」

「ここも、幹線道路、五十四号線の工事によって、なくなってしまうのでしょうか」

「そうです。そうです。皆様が、このような場所を欲しなければ、それは当然、なくなります」

「ええっ？ では、望めば、存続するということですか」

「それが、宇宙の摂理です」

候老人は、涼しげにいて目を細めた。

「しかしね。いざという時は、この庭全体を池ごと、その壺に吸い取って、私は我眉山にでも逃げるよ」『閑話茶店』の主人は、腹を抱えてホッホッホーと笑った。

「——なんだかまるで、老子みたいな人ですね」

感銘したように、澤田がいった。

「ここは、下北沢の風水の中心ね。微妙な諸力が、ちょうどその辺で」と、老人は柳の木の脇の中空を、人差し指で示した。「組み合わせさっている。ここで皆様が意識したことが、周囲の環境や未来を、大きく変えてしまう」

「ふふふ。あのね、君たち。あまり候さんのいうことをまともにとると、とんでもないことになるぞ。ほどほどにしといた方がいい。この人、台湾の魔法使いだから」

にやにや笑いながら牧田画伯がいった。候老人も、ホッホッホッと、ほがらかに笑った。

再び優雅なアイリングが、背筋をのばした品の良い歩き方で、それぞれのテーブルに飲茶の茶菓子を運んできた。室内ではバロック音楽が低くかかっている。

雑草や苔は伸び放題といった有様だったが、沈んだ色彩が程良く調和している。忘れられた廃園のような、それでいて荒れたところのない閑雅な空間であった。

一同は、時間の静止したような庭の中で、お茶を何杯も啜り、ゆらめくような池の光に目を細め、幸福な気持ちになった。

太陽光線の中に虹色の粒子がまじっているような、静謐な午後のひとときであった。濃いオリーブ色を帯びた池が、鯉の動きとともに、ゆるやかに光を放つ。ここにいつの日か、パワーシャベルやクレーンが乗り込んで来るなど、まるで考えられなかった。

「そろそろ、上へ参りましょうか」と、候老人。

「今日は、いいのではないですか」と牧田画伯。

「いやいや、先生もぜひ」

二人の間でそんなやりとりがあり、牧田画伯は苦笑いした。「私は、ここでパイプを燻らせていますよ」

「では、先生以外の皆様……ご案内いたします」

候老人が手招きをするので、ツアー一行は奥の室内に上がった。

床が黒光りするような、しんとした廊下の右側、観葉植物の背後に階段が見える。

二三段進むと、候老人は、また手招きをする。

羽木務やマスターが階段を上ると、立派な額に入った油絵が壁に飾られていた。

それは、木陰の下で食事を嗜む人々の姿であった。木洩れ日が、男女の肩に斑に差している。閑静な住宅街の中のフレンチ・レストラン。どこかで見たような風景だ。そのすぐ斜め上には、『下北沢スズナリ劇場』とあった。十号くらいだろうか。曇天の下に小劇場の特徴的な建物が、筆の跡もあらわな荒いタッチで描かれていた。

その隣には、劇場周辺の猥雑な飲屋街を描いた作品。ユトリロやブラマンク、佐伯祐三など、エコール・ド・パリの画家たちの懐かしい画風に似ていた。さらに階段を昇ると、金縁の豪華額に『カトリック世田谷教会』の白い建物が描かれていた。

その隣に『洞窟の聖母マリア』——。

羽木務は、ここで目が、釘付けになった。

いつか破壊されることを知っている白い聖母。両手を祈りの形にして、天を仰ぐマリア。まさに受難の聖母ともいうべき、美しい一枚だった。彼はほとんど宗教画を前にしたかのような強い感銘を覚えた。

「ひょっとして、牧田先生の絵ですか、この作品」

羽木務はいった。

「その通り。巨匠は照れて、こちらにいらっしゃらない」店主は、静かに微笑んだ。

「そうか。今日、歩いてきたところが、ぜんぶ絵に描かれているわけね」

美人区議が、口元を押さえるようにして、叫んだ。

「私は、牧田画伯のコレクターね。これまでに、パリの街角の絵を含めて、三十点は持っている。代官山や表参道の同潤会アパートを描いた絵も、傑作です。失われた風景をいとおしむ気持ちが、よく出ています。あのセンセイ死ねば、この作品ぜんぶ値があがるよ」

満月のような顔をした候老人は、破顔一笑した。

『駅前マーケット風景・夏』『ビリヤード場にて』『レディ・ジェーンの夜更け』『夕暮れの代沢三差路』『J A Z Z喫茶マサコ』『露崎館』『アンティーク・ショップ』『深夜のマザー』『茶沢通りにて』『秋のプロテスタント教会』——。

下北沢の特徴ある建物や、街並みの絵画作品が、白い壁一面に飾られている。かつて存在していた建物や、これから壊されるかも知れない建物。街の匂いや歴史までが、いつくしむような筆遣いで描き上げられていた。

一同は候老人に促され、二階の部屋を横目に、さらに階段を上がってゆく。上の階からさらに上の階へ。それはまるで縦に作られた路地のようでもあった。

「ここが、閑話茶館の最上階です」

ツアー一行は、楼閣のような建物の欄干に出た。

——目の前には、大空が広がっていた。

遠く新宿の高層ビル群が、蜃気楼のように青く霞んでいる。

西の空いっぱい、赤あかと夕陽が射して、赤紫色の雲が浮かんでいる。街の屋根屋根は、金色

の光を帯びたおびただしい鱗片のように染まっていた。小さな無数の路地が見える。垣根や、軒や、看板や、洗濯物。古着屋のディスプレイは、まるで極彩色の花壇のようだ。そぞろ歩きをしている若者たち。彼らの長い影。自転車。バイク。店の呼び込みをしている店員たち。ショウウィンドウの中のハイヒールや、エナメルバッグや、帽子の類。

これは錯覚なのか、三階建ての建物にしては異様に高い気がする。まるで雲の上にいるような夢のような気持ちだった。

「まあ、こんなに路地裏がいっぱい。じつに不思議な迷路ねえ、この街は。あちこちの水路で、藻や岩に隠れながら、色とりどりのお魚たちが遊んでいるようだよ」

欄干に両手をつき、高揚した御厨女史が、歌うようにいった。

小田急線が低い憂鬱な音を響かせて、滑るように走行している。

遠方では、夕日を受けたガラス窓が金の板のように反射している。羽木務は、目の前に広がる風景が、なぜか遠い記憶のようにも思われた。迷路のように巡る路地という路地に、林檎酒のような夕陽が射して、金色に輝くようであった。

*

《路地裏ツアー》の一行は、まるで龍宮城か桃源郷のような所から戻ったような奇妙な虚脱感に浸っていた。候老人とアイリンが、手を振りながらこちらを見ていたのは覚えている。しかしあの庭からどの路地を通して、ここまで来たのかわからない。皆はただ、牧田画伯の後をついてきただけだった。羽木務は、もう一度、『閑話茶館』を訪れようとしても難しいかも知れないと思った。たまたまあの場所に出くわしても、空地の中に飴色の壺が一個ごろりところがっているだけ、なんてことにもなりかねない。

歩き疲れた彼らは、ビールでも飲んで、簡単な打ち上げをしようという話になった。

仕事が控えている羽木務は、申し訳なさそうにマスターに頭を下げた。

「残念だなあ、みんなにウチに来てもらって、一杯やろうと思ってたのに」

「いえ、また今度、そういう機会もあると思いますので」

「ロシナンテには、あたしもしょっちゅうお邪魔するの。この人、カクテルの腕前、最高なのよ。ぜひ、いらっしゃいよ」と御厨女史。

「そうですね。場所は先程教えてもらったので、すぐわかると思います」

「あ、そうだ。大事なこと忘れてたわ」女性区議会議員は、そそくさと名刺とパンフレットを取り出して、羽木に渡した。「次の選挙、よろしくね」

大きな顔写真入りの派手なパンフレットだった。

羽木務がそれを読んでいると、不意に肩をつつかれた。

「最後に一枚、撮って貰えますか」

朴と金の二人連れが、申し訳なさそうにデジカメを渡してきた。

またしても二人は、いきなりぎゅっと頬を寄せ合い、笑顔でVサインを作った。

「はい、チーズ！」下北沢駅を背景に、二枚撮った。

「あの庭で、撮りたかったよ。でも、あのお爺さん、離れなくて。日本の年寄りしつこいね」女の方が、不服そうに口を尖らせたので、羽木は笑い出した。彼氏の方は、慌てて「シーッ」と

口に指を当てた。

羽木は、最後に牧田画伯に挨拶した。そして「あの人、ずっとツアーのメンバーを撮ってましたよ」と小声で伝えた。

白ナマズは、やや距離を置き、手持ちぶさたのような顔で佇んでいた。

画伯は「知ってます」といった。「スパイだよ、あの男。市民運動を監視している。妙なところでメモばかりしているしねえ。普通の参加者が反応しないようなところでね。我々一人一人の顔写真も撮っている」

「やっぱり。そうだろうと思ってました」羽木務は唾を飲んだ。

「背景は、どっちですかね。不動産業者か、電鉄か、行政か」

隣で腕を組んでいた澤田が、目配せをした。

「だいたいの見当は、ついている」

牧田画伯は、そういつてから、一日の用を終えた緑色の旗を、ゆっくりと巻き付けた。

羽木務は駅前でバー『ロシナンテ』に流れる一行と別れた。慌ただしい駅前の雑踏は、しだいに夕闇の中に沈んでいった。

小田急線の喜多見方面に向かおうと、駅のプラットフォームに立つと、例の長身の白ナマズが、階段脇の人混みの中にいるのに気がついた。

羽木務はぎくりとし、相手に気づかれていないことを確かめた。白ナマズは、携帯で話中だった。電車の出入りの音がうるさいためか、片耳を手で覆っている。その横顔は、冷酷な尼僧のようだった。

「——そうです。ええ。合計八名参加。リーダーは、牧田徹吾という例の絵描きの爺さん。ミクリヤ？ ええ、今回は区議も来ています。すいません、そこはまだ不明です。その辺は調査中ですので。はい、了解。まもなくそっちに戻ります——」

羽木務は、相手に気づかれぬように、反対側を向き、そのまま文庫本を取り出して、立ち読みするふりをした。列車が滑り込み、構内が暗くなった。

ドアが開き、白ナマズが大股で乗り込んだ。彼は一電車遅らせることにした。 (了)

下北沢路地裏ツアー

<http://p.booklog.jp/book/21739>

著者 : grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21739>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21739>